

令和5年度 茨城県立農業大学校評価表

重点目標 I 【 農業実践力を養う教育内容の充実 】

1 現状及び課題、並びに評価項目

現 状	課 題	評価項目（達成目標）
○農業振興に貢献する優れた農業者等を育成するため、県総合計画に沿って経営者マインドの醸成に向けた経営実践プロジェクト学習に取り組み4年が経過した。農学科では学生が組合を設立し、利益を確保するための価格設定や販売方法を検討し独自の販売を行うとともに新たな販売先を模索している。また、園芸学科では対象品目を選定し、学生に消費者ニーズに沿った品種選定、栽培管理、販売といった一連の流れを経験させ、経営感覚が養われつつある。	○価格設定、販売力、コスト意識などが十分とはいえないため、経営者意識を身に着けさせる。	経営者マインドの向上 経営者マインドの向上した学生割合 100%
○農業の現場では、農業所得の向上を目指してドローンや環境制御装置など ICT 技術の導入を推進していることから、学生に新技術等の知識を習得させるため、農機メーカー等と協力して専攻実習の時間に機械の実演会等を実施するカリキュラムを取り入れている。 ○就農・就職した際に GAP 分野でも即戦力となる人材や、将来的には GAP を取り入れた持続的かつ効率的な農場運営で儲かる農業を実現できる農業経営者の育成を目指して、ASIAGAP 基準に沿った教育を行っている。 ○SDGs や環境に対する関心が国内外で高まり、国において「みどりの食料システム戦略」が策定されるなど、農業において環境との調和や持続性の取り組みが求められる中、県では有機農業の推進に力を入れている。	○新技術や新たな取り組みに関する知識を習得するためのカリキュラムをさらに充実させる。 ○GAP の継続認証による実践を伴った教育を続けていく。 ○県の施策の方向性を鑑み有機農業に関するカリキュラムを拡充する。	新技術や新たな取組に関するカリキュラムの充実 ICT 研修会開催 延べ13回以上 ASIAGAP の継続認証 3品目 新規認証 1品目 有機農業実践経営体での実習 3人

2 評価項目別の評価及び次年度の課題

(1) 経営者マインドの向上

達成目標	達成度	評価の概要	関係者評価委員会からのコメント [全般]
経営者マインドの向上した学生割合 100%	B	将来農業経営を行っていく際に栽培技術だけでなく経営管理が大切になるとの意識が向上したと回答した学生の割合が99%と、目標の100%には達しなかったものの、ほとんどの学生の経営管理に関する意識が向上したことが確認できた。 学生に対し、経営感覚を醸成する学習の機会を提供し、効果測定のためのアンケートを実施した結果、56%の学生に対し経営管理に興味を持たせることができた。特に、事業や売上などの目標設定、原価計算や収支計算などのコスト意識の重要性を認識させることができた。	経営実践プロジェクト学習では、販路が拡大し、また学生の経営やコストに対する意識が向上している。引き続き、推進してほしい。 達成度の評価基準と照らし、B評価は適当である。

達成度の評価基準	
A	100%達成
B	80～99%の達成
C	60～79%の達成
D	40～59%の達成
E	39%以下の達成

目標達成に向けた具体的方策	具体的方策の取組実績及び成果	次年度の課題	関係者評価委員会からのコメント
<p>ア【拡充】経営感覚を醸成する学習機会の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> 経営実践プロジェクト学習により生産から、販売を考えた商品設計、営業、納品までの一連の事業活動を学生に体験させ、企画力販売力の向上をはかる。併せて学生自ら原価計算、価格設定を行い、売上を把握することコスト意識を醸成する。 特別講義 8回 【R4実績：9回】 対象品目 8品目以上 【R4実績：8品目】 新規販路拡大 2か所以上 【R4実績：0カ所】 効果測定アンケートの実施 1回 【R4実績：0回】 農業者等が運営している農場等の見学や経営状況を学び、経営理念や経営手法を学ぶ。 先進農業派遣実習の実施 80か所【R4実績：75か所】 先進経営体視察研修の実施 6か所【R4実績：24か所】 	<p>ア 経営感覚を醸成する学習機会の確保</p> <p>【取組実績】</p> <p>(ア) 特別講義</p> <ul style="list-style-type: none"> 経営における目標設定や事業計画策定の重要性、販売価格の設定や販売戦略の策定の方法を学んだ。 農学科・畜産学科では、農大卒の社長を講師に、コスト計算の重要性や経営改善の意識を学んだ。 自家就農及び新規参入希望者に対する研修会を実施し、延べ26名の学生が就農後の経営ビジョン作成手法を学んだ。 特別講義：9回（農学科、畜産学科5回、園芸学科4回、研修会1回） <p>(イ) 経営実践プロジェクト対象品目</p> <ul style="list-style-type: none"> 農学科では、B品を加工することにより商品価値を高め、販売を行うことを企画し、新規商品として梨の「ド 	<p>ア 経営感覚を醸成する学習機会の確保（経営実践プロジェクト学習の実施）</p> <ul style="list-style-type: none"> 経営者マインドの醸成につながる重要なカリキュラムであり効果も確認できた。今後も力点を置いて継続する。 農業部においては自分たちが作った作物で実際に事業活動に取り組む学生が限られていることから、より多くの学生が企画力販売力の向上が図れるよう専攻実習等の授業内で活動時間を確保し、1・2年生全員で取り組む。 (先進経営体視察研修の実施) 次年度も引き続き、学生が幅広い視野と高度な技術・経営能力を学修できるよう、積極的に先進事例先の訪問等を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 県の意欲ある担い手の育成・確保という施策を踏まえて、経営実践プロジェクト学習を進めていることはよいことである。

	<p>ライフルーツ」開発に取り組み、試験販売を実施した。 対象品目：5品目（ジャガイモ、ナシ、ブドウ、干し芋、ドライフルーツ）</p> <ul style="list-style-type: none"> 園芸学科では、全学生が取引先と継続した販売をおこなった。前年度の販売実績を分析・検討することで販売先のニーズに適した商品提供が課題とわかり、見た目が良く大きさを揃ったトマトの生産量増に取り組むことができた。 <p>対象品目：5品目（イチゴ トマト 高糖度トマト、シラメン、ストック）</p> <p>(ウ) 経営実践プロジェクト新規販路拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> 農学科では飲食店と商談を行い新たな取引を開始した。また、量販店へ出店販売を行い直接消費者に販売することで、消費者ニーズの把握や商品の説明、PR方法等について学んだ。 <p>新規販路拡大：1か所</p> <ul style="list-style-type: none"> 園芸学科では、新たな商品企画を行い、坂東市内の直売所で新規に販売を開始した。また、販売会や量販店等で出店販売を行い、直接消費者に販売することで、消費者ニーズの把握や商品の説明、PR方法等について学んだ。 <p>新規販路拡大：1か所</p> <p>(エ) 効果測定アンケート</p> <ul style="list-style-type: none"> 一連の取り組みの効果を測定するためアンケートを実施した(74名)。その結果、将来農業経営を行う場合、事業計画策定やコスト計算等の経営管理に関する意識が向上したと回答した学生の割合は99%(うち多いに向上したと回答した学生28%)と高かった。 <p>(オ) 先進農業派遣実習の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生は、先進農業派遣実習を通して、現場の高い作業効率を体験するとともに、収益をしっかりと考慮した経営管理により経営を発展させている事例を目にすることで、派遣先への就職が決まるなど、就農に向けた意欲や関心をさらに高めることができた。 <p>先進農業派遣実習の実施：80か所</p> <p>(カ) 先進経営体視察研修の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 学科コース毎に校外学習を計画し、先進経営体の圃場、施設、経営状況を学ぶ機会を確保した。 <p>経営手法視察先：26か所 (先進技術・販売方法も含め37か所)</p> <p>学習目的別(延べ)：経営手法26か所、先端技術31か所、販売方法17か所</p> <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 経営実践プロジェクト学習や先進農業派遣実習、視察研修により、多くの学生に対し経営管理に興味を持たせることができた。また、ほとんどの学生が、将来農業経営を行っていく際に栽培技術だけでなく経営管理が大切になるとの意識が向上したとことがアンケート調査より確認でき、経営者として必要な心構えとコスト意識を醸成することができた。 		
--	---	--	--

(2) 新技術や新たな取組に関するカリキュラムの充実

達成目標	達成度	評価の概要	関係者評価委員会からのコメント [全般]
ICT 研修会開催 延べ13回以上 ASIAGAP の継続認証 3品目 新規認証 1品目 有機農業実践経営体での実習 3人	B	ASIAGAP および有機農業実践経営体での実習については目標を達成することができたが、ICT 研修会開催は達成率92%にとどまった。 ICT の研修会開催は目標回数を満たすことはできなかったが延べ12回開催し、自動給水栓やアシストスーツなど過去にない新たな機器について学ばせることができた。 ASIAGAP については、学生とともに審査の準備を進めた結果3品目の継続および1品目が新規で認証された。また、園芸部において抑制メロンの認証を受けるため、管理マニュアルの作成作業を進めた。 プレ農業人フェスタ等を活用し、学生を有機農業実践経営体での先進農業派遣実習へ誘導した。その結果、有機農業実践経営体で5名の学生が実習を経験し、2名の学生の有機農業実践経営体への就職が決まった。	ASIAGAP 認証が1品目増加したことは、より多くの学生が学習できる環境になりつつあり、評価できる。更なる品目数の増加を期待する。 有機農業について、有機農業実践経営体を進路として選択する学生が現れていることは取り組みの成果であり、今後の広がりが期待できる。 達成度の評価基準と照らし、B評価は適当である。

達成度の評価基準	
A	100%達成
B	80~99%の達成
C	60~79%の達成
D	40~59%の達成
E	39%以下の達成

目標達成に向けた具体的方策	具体的方策の取組実績及び成果	次年度の課題	関係者評価委員会からのコメント
<p>ア【拡充】ICTなどの最新技術の習得機会の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> 最新かつより有用な技術について学習させるため、関係機関や民間との協力による講義や実習を実施する。 4月~2月、延べ13回以上【R4実績：6回】 ICT機器を実習圃場に導入しプロジェクト活動等による効果検証を通じて新技術への理解を深める 	<p>ア ICTなどの最新技術の習得</p> <p>【取組実績】</p> <p>(ア) 関係機関等と連携した実演会等の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学科コースでAI養液土耕施肥システムの活用法、ドローンによる薬剤散布実演、作業負担を軽減するアシストスーツの体験学習などを実施した。 実演会等：延べ12回、141名(4月~10月) (農学科6回112名、畜産学科1回10名、研究科1回2名、園芸学科3回49名) <p>(イ) ICT機器の導入による実用性理解の促進</p> <ul style="list-style-type: none"> 普通作コースおよび露地野菜コースの学生は、直進アシスト機能付きトラクターにより、レタス定植準備のための全面マルチ張りやサツマイモならびにサトイモの畝立マルチ張り作業を行うことでICT機器の実用性に対する理解を促進させることができた。 果樹コースの学生は、根域制限栽培のブドウ、ナシ栽培を自動灌水システム活用することで、作物状況にあった最適な液肥供給量を判断し自律的に供給する方法を学ぶことができた他、課題解決型学習で活用法の検討に取り組んだ。 農林水産省関東農政局那珂川沿岸農業水利事業所と協定を締結し、実習用の水田に自動給水栓を導入した。併せて、課題解決型学習のテーマとして、3名の学生が同システムによる水管理労力の軽減、適切な水管理による収量や品質向上などの効果検証に取り組んだ。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ICTなどの最新技術の習得機会の確保することで学生が最新かつより有用な技術について学ぶことができた。併せて、ICT機器を導入し学生が使用することで、最新技術の必要性や利便性を理解させることができた。その結果、学生4名が就農後の導入を見込み、在学中に講習を受講することでドローンの操縦免許を取得した。 	<p>ア ICTなどの最新技術の習得</p> <ul style="list-style-type: none"> 次年度も最新かつ有用な技術を選定のうえ、計画的に農機メーカー等と連携した実演会を実施するとともに、導入したICT機器を課題解決型学習のテーマとして学生が取り組めるよう誘導する。 今年度は農学科露地野菜コースでは展示会参加へ学生を誘導することはできたが、実演会等の開催や課題解決型学習のテーマとして取り組めなかったため、次年度は改善を図っていく。 	

<p>イ【拡充】GAPの実践による学習機会の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> 農学科・畜産学科においては、ASIAGAP [メロン、ネギ、ナシ] の農場運営を手本に、全体でGAPの概念を取り入れた実習を実施する。 認証継続3品目 新規認証1品目 (ブドウ) 【R4実績：3品目】 園芸学科においては、品目の選定などASIAGAP 新規認証取得にむけ書類整備などの準備をすすめる。 認証取得に向けた取り組み品目 (抑制メロン) 	<p>イ GAPの実践による学習機会の確保</p> <p>【取組実績】</p> <p>(ア) GAP 認証継続および新規認証</p> <ul style="list-style-type: none"> 農学科、畜産学科の1年生全員に対し計12時間の講義を行った。 専攻実習の時間を活用し、農学科露地野菜コース及び果樹コースの学生が校内予備審査に参加し、書類の不備及び実習棟の管理状況を把握した。併せて、農場運営マニュアルの見直しを進め、廃棄物や農薬の取り扱いについて修正した。 審査を経て指摘事項について改善をすることでメロン、ネギ、ナシの認証継続ならびにブドウの新規認証を得ることができた。 認証継続：3品目 新規認証：1品目 (ブドウ) <p>(イ) GAP 新規認証に向けた取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 園芸学科では職員3名が茨城県GAPセミナーに参加し(12/12)、職員のGAPへの理解を高め、学生へのGAP指導にあたった。また、GAP認証取得に向けてスケジュールを整理し、令和7年度認証取得を目標として定めた。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 農学科では、学生が講義や実習を通じて農業経営上のリスクとその対策を把握し、GAPに必要な適合基準を理解したほか、実際の審査の方法を学ぶことができた。その結果、継続審査の現地確認の際、審査員から指示された農薬や資材などの提出などを学生自らスムーズに行うことができた。 園芸学科ではGAPセミナーに参加することで、職員の理解を深め、学生への指導力を高めることができた。また、スケジュールを整理し、目標を定めることで、GAPに対する職員や学生の意識を高めることができた。 	<p>イ GAPの実践による学習機会の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> 農学科では引き続き、講義、農学科全体でASIAGAPの概念を取り入れた実習を継続する。 園芸学科では、令和7年度認証取得を目指し、GAPの考え方を取り入れた実習活動を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> GAPは新規で認証(ブドウ)を受けたことは評価できる。さらに認証の品目を増やして、多くの学生が学習できるようにするとよい。 今後は、1つ上のレベルの認証(グローバルGAP)を検討してほしい。
<p>ウ【新規】有機農業に関する学習機会の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> 環境や持続性に配慮した農業について理解を深めるため、特別講義を開催する。10月 1回 土壌肥料学、農業機械学、植物病理昆虫学などの講義で有機農業に必要な栽培技術を学ぶ。 経営体の実態を学ぶためプレ農業人フェスタなどで県内大規模有機農業実践経営体への研修へ誘導する。 3人 	<p>ウ 有機農業に関する学習機会の確保</p> <p>【取組実績】</p> <p>(ア) 特別講義</p> <ul style="list-style-type: none"> 有機農業教育を推進するため、有機農業の学修カリキュラムを整理し体系化した。(6月) 農学科、畜産学科、研究科の学生が、みどりの食料戦略の実現に向けた有機農業の必要性や、県の取り組みを学習するとともに、実践する農業者から有機農業の魅力と実践について話を聞き理解を深めた。 特別講義開催：1回(10/18、85名) <p>(イ) 既存講義における栽培技術の学習</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学科コースの学生が、土壌肥料学、農業機械学、植物病理昆虫学などの講義で有機農業に必要な栽培技術を学習した。 有機農業での栽培技術学習機会：15回 (農学科・畜産学科7回、園芸科6回、研究科2回) <p>(3) 有機農業の体験</p>	<p>ウ 有機農業に関する学習機会の確保</p> <ul style="list-style-type: none"> 有機農業の概論を学ぶ講座を授業計画に組み込むとともに、引き続き視察等により実践経営体の実例を直接学ぶ機会を設ける。 また、実習で活用する機器(除草機)を導入し、プロジェクト学習のテーマとして有機農業に必要な除草技術の検証を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 学生4名が有機農業実践経営体に雇用就農することが決まったことは、プレ農業人フェスタなどを通じて、学生と経営体がうまくマッチングできた成果である。

	<ul style="list-style-type: none"> ・特別講義や学生をプレ農業人フェスタに出展した有機農業実践経営体への派遣実習に誘導した結果、農学科の学生4名および研究科学生1名が、有機農業で野菜を栽培している経営体で長期派遣実習を行った。 <p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・有機農業への興味を持った学生が講義前に比べ70%増加し、35名の学生が有機農業実践経営体への就職に興味をもった。また、学生4名が有機農業に取り組む農業法人に就職した。 		
--	--	--	--